

映画『ボブという名の猫』(2016)に観る プロット交差点と回転軸 — 極めゼリフをコーパスで深層学習 —

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）
塚田 三千代（翻訳家・映画アナリスト）

1. はじめに

映画は楽しく面白い上に臨場感に富み、わかりやすくて納得できるものであることから、教育資源の一つとなっている。ある表現の意味（思想）を、言葉だけでなく音映像で理解して習得（体得）できるからである。これは母語の習得過程にも通じるものがあることから、運用面での効果（生産性）も期待されている。

2. 目的

映画のテーマや表現を使った学習を I T・A I と結び付けた新手法を提案する。

第一の特徴は、ウェブ・コーパス検索エンジンによる探索型学習である。定型的に整理された伝統的学習教材による学びにとどまらず、自律的探索的な学びが可能である。かつては資金のある研究者や学習環境でしかできなかつたことが、生徒がスマホで手軽に検索できる時代になっている。

第二の特徴は、「文化と言語」の二要素を分離したうえでの統合である。一人の教員が映画の文化面と言語面を同時に研究・教授するのはベテランでも大変である。そこで文化と言語のそれぞれの専門家が一本の映画を別途研究し、その後に統合する。統合するカギが映画の中の特徴的なシーン（極め台詞）である。

3. 方法

いずれも薬物依存症をテーマにした2本の映画「A Street Cat Named Bob (2016) ボブという名の猫」と「Beautiful Boy (2017) ビューティフル・ボーイ」を題材とした。それぞれイギリスとアメリカの作品である。発表は文化面と言語面に分け、本稿では言語面に絞って行い、文化面は別途、塚田・田淵の発表で行う。

3.1 「ボブという名の猫」の言語面からの解析

「ボブという名の猫」（以下「猫」）を事例とした解析手順を記す。

- (1) 映画を鑑賞するか、あるいは予告編ビデオを見て、
- (2) テーマを際立たせるシーンから極めのセリフ（ここでは *luckily for me, I had some very important companions to help with my second chance*）を選ぶ。
- (3) このフレーズから語句「help with」を抽出して対訳コーパス・CORPORA、さらに Google・image で検索する。ヒット結果を細かに閲覧し、一方では映画シーンと同等の場面、他方では「help with」のよくある場面を摘出することで、
- (4) 場面の理解を深めるとともに、汎用的な英語運用力を高める。

手順(3)の CORPORA では、英語「help with」検索と、それに対応する字幕訳「おかげ」検索を行う。またそれについて、検索結果に対する対訳フィルタと共に起フィルタを活用する。和訳検索を行うのは、日本語「～のおかげ」の一般的な

英訳を知るためにある。共起フィルタでは、検索語句を含む字幕内に同時に現れる語句を見つけることができる。対訳フィルタでは、検索語句を含む対訳文内に同時に現れる語句を見つけることができる。

3.2 「ビューティフル・ボーイ」の言語面からの解析

「ビューティフル・ボーイ」(以下「ビュ」)ではセリフ “you’re gonna get it back お前らしさは必ず取り戻せる” のシーンに注目し、語句「get it back」とそれに対応する字幕訳「取り戻(す)」の検索を行う。検索語を語幹「取り戻」にとどめるのは「取り戻さ」などの活用もヒットさせるためである。

4. 結果

たとえば「help with」の対訳フィルタからは、「～のおかげ」の訳はみつからず、「支援」とか「手伝」などが多いことがわかり、「おかげ」の対訳フィルタからは、「help with」は見つからず、「because」や「thank」が多く見つかった。このことから「ボブのおかげで別の人生もある」は「companions to help with my second chance」の意訳(名訳)であることがわかる。「help with」の用例としては「help with the hatches ハッチを閉めるのを手伝う / King Kong(1933) / CORPORA Seleaf コーパス」や「help with the dishes 皿洗いを手伝う / Google・image」が見つかった。

CORPORA TED コーパスで「get it back」を「取り戻す」と訳したものは、17件中5件であった。Google・imageでは、「help with」において具象的な絵が多かったが、「get it back」では喪失感や紛失を伴う抽象的な絵が目立った。

5. 考察

英国映画「猫」では、猫の助け(help with)で薬物依存から脱出して第二の人生に踏み出した様子が「help with」のシーンに象徴されていた。他方米国映画「ビュ」では、喪失感と悲惨さが強調され、平穏な生活に戻る(get it back)ことを目指す気持ちが「get it back」に集約されていた。この姿勢(復元願望)は同じ米国映画「Ben is Back」(田淵・塚田, 2019)でも見受けられたものである。

薬物依存を誘発した生活から脱出(英国)するのか、過去への復元(米国)を望むのかの姿勢(文化)の違いを浮き彫りにしているように見受けられた。この辺りは、塚田・田淵の発表に譲る。発表者は「get it back」に過去への執着、「help with」に未来への希望を見た。

6. 終わりに

薬物依存に対する国情の違いを通して深く考えるきっかけとなれば幸いである。この研究は、ATEM SIG (Special Interest Group) 研究の一環である。

参考

CORPORA: 日英対訳映像コーパス. <http://www.mintap.com/talkies/pac/> ミント音声教育研究所

Google・image: <https://www.google.com/search?q=help+with&tbo=isch>

田淵龍二・塚田三千代(2019)「“Ben is Back”, “Beautiful Boy”に観る家族間コミュニケーション/映画英語表現の深堀り」ATEM 東日本支部 夏季例会。
Retrieved from: http://www5b.biglobe.ne.jp/~mint_hs/news/atem20190616_3.html